

介護老人保健施設しおん

症 例 概 要 ご利用者 : 女性 要介護4

利用期間 : R6年7月から現在

現病 : 脳出血

既往 : 高血圧症、子宮瘤嚢腫

経過 : R6年1月に自身で営む美容院勤務中に倒れA病院に搬送。上記診断にて経鼻栄養を開始。リハビリ目的のためB病院へ転院し、経口摂取と経鼻栄養を併用していた。1日1回経口摂取により6割程度摂取していた。ご家族が、経口摂取のリハビリが進まない原因は経鼻チューブによる嚥下・咀嚼の障害が原因ではないかと考え、胃瘻増設を希望。転院し胃瘻増設後に、B病院へ再入院する。家族は在宅復帰を希望し、当施設へR6年7月に入所される。

内 容

氏は右麻痺、失語の症状がある。前医からは嚥下評価に基づき経口摂取は困難と家族は説明を受けていた。しかし長女は、いつか経口から3食食事が摂取できるようになることを願っていた。介護老人保健施設しおん入所後は、ご家族の希望を踏まえつつ、氏の状況を確認しながら、嚥下リハビリと胃瘻からの経管栄養、日中は起こして生活リズムを整えるなどの支援を行っていた。

ところが、ご本人による胃瘻の自己抜去が複数回みられた。ケアマネ・ST・介護職・看護師・医師とカンファレンスを行い、今後の対応方針について2025年7月にご家族と人生会議を実施。長女から、ご本人は病気を患う以前に、「もしものときは管を繋ぎながら生きたくない」と語られていたこと、長女もご本人の意思を尊重したいとのことから、胃瘻は再挿入せず、しおんでの看取りを選択された。そのうえで、可能な範囲で経口摂取や外出を希望された。

治療は、末梢からの補液およびてんかん発作を抑制する点滴治療に切り替えた。しかし、自己抜去が続き点滴ルートの確保も困難となってきた。そこで、STと情報共有を図り経口摂取の現状を観察した。飲み込みに多少の時間を要するが、むせがほぼ無いことから嚥下可能であることを確認。とろみ剤を添加したスープも介助下で安全に経口摂取できていた。STからの指導を受け、口腔マッサージ・食事介助を実施。また施設医師への報告と診察を依頼し、てんかん発作を抑制する内服薬の経口摂取を試みることとなった。

甘い食品は好まない様子を見せたが、スープを口に含んだ際には、目を細めゆっくりと味わうように嚥下し、口元には穏やかで満ち足りた表情が浮かんだ。その姿は、これまでには一度も見たことがない表情であった。氏の目がキラキラと輝き、幸福に満ちた感情が溢れ、食事への喜びと意欲が感じられた。

長女へ現状と、氏自身がスプーンを持ち1口食べている様子を動画にてお伝えすると「まさか自分で食事を食べるなんて思いもしませんでした。入院していたときはこんなこと一切なかったのに」と驚きを隠せない様子が見られた。

現在は歯科医師による嚥下状態の再評価を実施。日にちを改め、内視鏡下のもと摂取可能な食品を探り、食事の提供に向けて施設内外のour teamで取り組み、経口摂取量の増加に向けて段階的に進めていく。この一口は氏にとって、人生の活力になる可能性がある。我々もその思いを支え、今後も氏の「食べたい」を支援しながら「輝きの1日を」、ご家族に「安心を超える感動を」提供していく。

今回氏と関わった職種は、施設内：医師・看護師・介護職・ST・栄養士・PT・ケアマネ・相談員・ドライバー 施設外：歯科医師・歯科衛生士